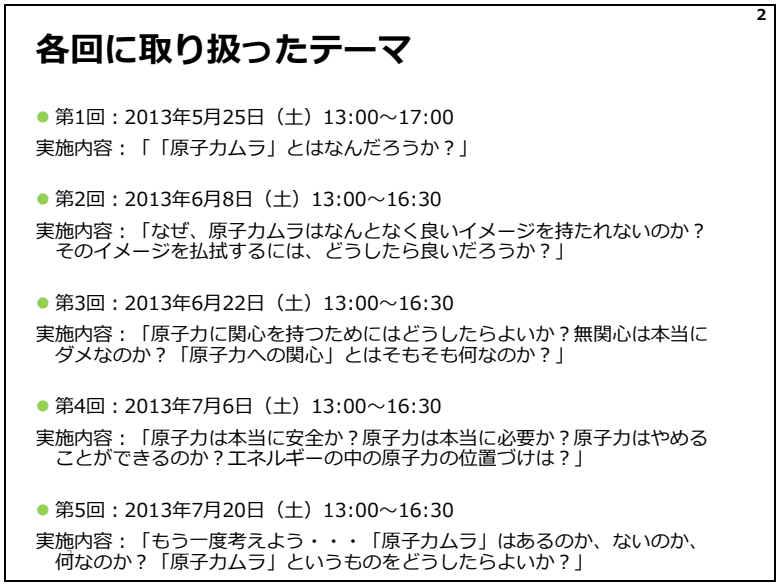
※発言をそのまま書き起こしたデータを基に、個人情報に関する部分を削除し、文意が通るように修正を行っています。

フォーラム実施状況の紹介

竹中　一真　氏（NPO 法人パブリック・アウトリーチ／東京大学）
鬼沢　良子　氏（NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット）

（司会）　それでは次に、「フォーラム実施状況の紹介」を、NPO 法人パブリック・アウトリーチ研究員、竹中一真さんにお願いいたします。

（竹中）　NPO 法人パブリック・アウトリーチの竹中から、フォーラムの実施状況の紹介をさせていただきたいと思います。運営側として、フォーラムをどのように見ていったのか、という話をしていきたいと思います。



こちらが、全 5 回のフォーラムで扱ったテーマになっております。

第 1 回のテーマは、「「原子力ムラ」とはなんだろうか？」。

第 2 回は、「なぜ、原子力ムラはなんとなく良いイメージを持たれないのか？　そのイメージを払拭するには、どうしたら良いだろうか？」。

第 3 回は、「原子力に関心を持つためにはどうしたらよいか？　無関心は本当にダメなのか？　「原子力への関心」とはそもそも何なのか？」。

第 4 回は、「原子力は本当に安全か？　原子力は本当に必要か？　原子力はやめることができるのか？　エネルギーの中の原子力の位置づけは？」。

そして第 5 回が、「もう一度考えよう・・・「原子力ムラ」はあるのか、ないのか、何な

のか？　「原子力ムラ」というものをどうしたらよいか？」。
こういったテーマを参加者の方々に話し合っていただきました。

3

フォーラム前に設定していたテーマ案

	テーマ案	実際の内容
第１回フォーラム	「原子カムラ」とはなんだろうか？	「原子カムラ」とはなんだろうか？
第２回フォーラム	「原子カムラ」にある課題	なぜ、原子カムラはなんとなく良いイメージを持たれないのか？そのイメージを払拭するには、どうしたら良いだろうか？
第３回フォーラム	省エネを考える	原子力に関心を持つためにはどうしたらよいか？無関心は本当にダメなのか？「原子力への関心」とはそもそも何なのか？
第４回フォーラム	安全神話を考える	原子力は本当に安全か？原子力は本当に必要か？原子力はやめることができるのか？エネルギーの中の原子力の位置づけは？
第５回フォーラム	フォーラムを通して、私たちは変わっただろうか？	もう一度考えよう・・・「原子カムラ」はあるのか、ないのか、何なのか？「原子カムラ」というものをどうしたらよいか？

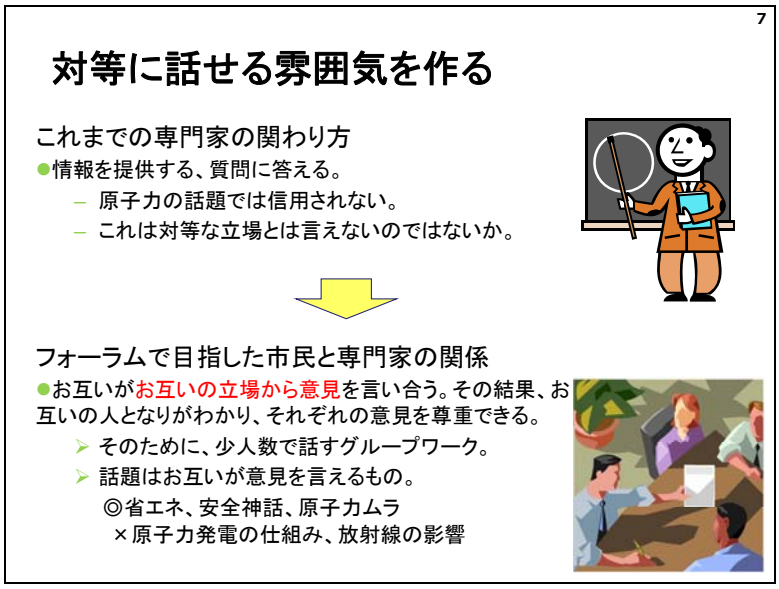
こちらは、フォーラム前に我々運営陣がテーマ案として設定していたものになります。この表を見比べていただければ分かると思うのですが、実際に行なったテーマは、我々が最初に設定していたテーマから大きく変わっています。我々運営側としましては、参加者が話したいと思っているテーマをぜひ話してもらおうということで、テーマが変わることは想定していたことではあるのですけれども、では、我々がどのように考えてテーマを変えていったのか、フォーラムを設計していったのか、という話をしていきたいと思います。

ということで、本日お話しする内容は、
運営側の人間が、フォーラムへの準備として何をしたのか。
どのようなことを考えて、１回１回を設計していったのか。
その結果、フォーラムでどのようなことが起こったのか。
その中で何を反省して、それをどのように次に活かしたのか。
こういう話をしていきたいと思います。

事前の準備

まず、フォーラムの準備として、フォーラムの前に何をしていたのか。そして、どのような点でこのフォーラムは新しい取り組みなのか。という話をしたいと思います。
先ほど木村さんから、今回のフォーラムの目的を達成するための仕組みということで、

参加者が公平だと思える場作りをする、という話がありました。そのために、対等に話せる雰囲気を作ることが求められます。また、冷静な話し合いを導くために、その場を客観的に捉えるために、コミュニケーション・マニュアルを整備したり、ファシリテーターという役割を設けたりしました。こういった点について、運営側が何を考えて設計していったのか、もう少し詳しくお話ししたいと思います。



まず、対等に話せる雰囲気を作るための取り組みについてご説明します。

これは原子力に限らないのですけれども、これまで、専門的な話に市民が参加して、意見を言ったり、考えたりするような場は、いろいろなところで開かれてきました。では、そういう場において、専門家はどういう立場で関わってきたのかというと、情報を提供する、あるいは、市民からいただいた質問に答えるというような関わり方がかなり多かったのです。

現在、この関わり方には、いくつかの問題点があります。まず、原子力の専門家が何か情報を提供しても、あるいは、何か質問に答えても、「あの人は嘘をついているんじゃないか」と市民から思われてしまう。なので、今までの関わり方ではなかなかうまくいかないのではないか、ということ。

さらに言うと、専門家は、情報を提供する、質問に答えるという、ある意味先生のような立場で市民と関わっているわけですけれども、先生と市民という関係は、果たして対等な立場といえるのでしょうか。そういうところを今回のフォーラムではポイントとして挙げています。

では、今回、どのような市民と専門家の関係を目指していったのかといいますと、お互いがお互いの立場から意見を言い合う。その結果、お互いの人となりが分かり、それぞれの意見を尊重できる。専門家は、もちろん専門的な知識があるので、一般の人たちとは若

干考えが違うかもしれません。それでも、専門家もやはり１人の市民であるということで、しっかりと意見を言うべきなのではないか。参加していくべきではないか。ということで、市民と専門家が、対等な立場でお互いに意見を言う合うことを目指しました。

では、対等な立場で意見を言い合う場を、どのように設計していくか。まず、１人１人がどういう意見を持っているかということを知るためには、じっくり少人数で話し合うことが必要であろうということで、少人数のグループワークを中心にすることにしました。

また、話し合うテーマは、お互いが意見を言えるものにしないといけないのではないか。というのも、例えば、原子力発電の仕組み、放射線の影響というようなテーマだと、やはり専門家が持っている情報量が多くなってしまう。そうすると、情報提供の時間が長くなってしまったり、あるいは、それが終わった後でも、意見のぶつかりが多くなりがちなテーマであるため、お互いの立場から意見を言い合って、それをしっかりと受け止めるというような段階まで行くのに敷居が高いテーマになってしまうのではないか。

ということで、省エネ、安全神話というような、もちろん立場は違うので意見は違いますけれども、お互いがしっかり意見を持っていて、それを言い合えるようなテーマを設定していこうと考えました。

8

お互いを尊重するコミュニケーション

コミュニケーションの目的

- 自分の意見を忌憚なく話し、相手に伝える。
- 相手の意見をしっかりと聴いて、受け止める。
  - これらを支援するためにマニュアルを整備し、参加者にはフォーラム前にあらかじめ配布した。

コミュニケーションのルール（制作したマニュアルの一部）

- 「私は」という一人称で話すようにしましょう。（「私たち市民は」「われわれ専門家は」という話し方はしないように意識する。）
- 誰かが話しているときには、自分が次に何を話そうかと考えるのではなく、その人が話していることをしっかりと聞きましょう。
- 否定の言葉から話し始めるのは、なるべくやめましょう。「いや、そうではなくて、・・・」ではなく、「なるほど、そのような考え方もあるのですね。私の意見はそれとは異なりますが、・・・」という形です。
- 話しすぎない目安として、1人が1回に話すのは1分以内にしましょう。

次に、お互いを尊重するコミュニケーションの実現を目指しました。

その目的は、まず、自分の意見を忌憚なく話す。そして、それを相手に伝える。言いたいことを言いましょうということです。もうひとつは、相手の意見をしっかり聞いて、それを受け止める。非常に当たり前のことのように見えるのですけれども、この 2 つを重視していこうということです。

これを参加者の方に守っていただくために、コミュニケーション・マニュアルというものを整備して、フォーラム前にあらかじめ配布をしました。

その一部が、このスライドに箇条書きになっているものなのですけれども、こちらは、第 2 回フォーラムから活用した、簡易版のマニュアルとなっています。というのも、コミュニケーション・マニュアルは非常に分厚くて、かつ、ポイントが非常に多いということで、全てを守っていくのは難しい。ということで、その中で特に重点的に守ってほしいポイントをまとめたものを簡易版として用いることにしました。

自分の意見をしっかり言って、周りの人はその意見をしっかり聞く。それは自分とは違う意見かもしれないけれども、そのような意見もひとつの意見としてあるのだなということを尊重していく。そういうことをやってくださいとルールに書いていて、それがフォーラムの目的につながっていくだろうと考えております。

9

ファシリテーション

ファシリテーションとは
- 話し合いの進行役。
- 今回は皆の意見を引き出すことが目的。

なぜ参加者がファシリテーターを経験するのか
- 「ああ、こういう意見もあるんだ」「Aさんの意見とBさんの意見はこういう所が違うな」、という気づきはファシリテーションしているときに感じることが多い。
- 自分たちで話し合いの方向を決めていった、という公平感がある。

サブファシリテーター（運営側）の役割
- ファシリテーター（参加者）を支援する。
- コミュニケーションのルールが守られるようにする。

3 つ目に、ファシリテーションについてお話しします。

今回、ファシリテーションを参加者の方にやっていただきました。ファシリテーションというのは、話し合いの進行役と捉えてください。今回はその中でも、参加者全員の意見を引き出すことを目的としています。

なぜ参加者にファシリテーションを経験していただいたのかというと、「ああ、こういう意見もあるんだ」とか、「A さんの意見と B さんの意見はこういうところが違うな」というような気づきは、ファシリテーションをしているときに感じることが多いというアドバイスを元気ネットの方々からいただいたからです。それなら、ぜひ参加者にファシリテーションを経験していただこうということで取り入れた次第です。

ただし、いきなりファシリテーションをやってくださいといわれて、簡単にできるわけではないだろうということで、こちらについてもファシリテーション・ルールというマニュアルを作って、事前に配布をしております。

また、マニュアルを見ただけでファシリテーションをするというのも難しいことですの

で、ファシリテーターを支援する人として、運営側から「サブファシリテーター」を設置させていただきました。サブファシリテーターの役割は、参加者がやっているファシリテーションを支援すること。そして、先ほど言いましたように、今回のフォーラムではコミュニケーションのルールを設定しています。もし参加者の誰かがそのルールを外れるようなことがあったら、それを注意していただく。そのような役割をしていただくために、サブファシリテーターを設置させていただきました。

以上が、フォーラム前に我々が取り組んできた内容になります。

フォーラムの実施状況

次に、フォーラムがどのように行われていたのかという話をしていきたいと思います。

11

プログラムの定型：（例）第3回フォーラム

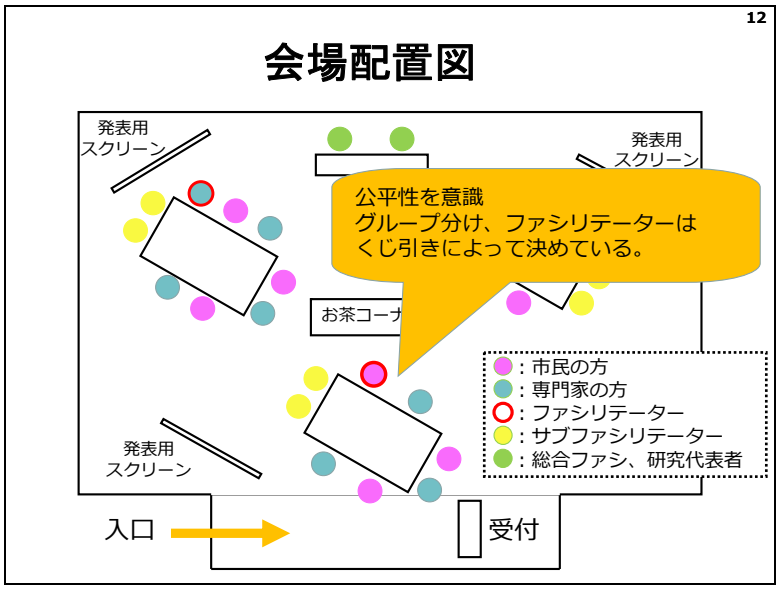
時間	実施内容
12:30	開場・受付開始
13:00	第3回フォーラム開始
13:00～13:30	【イントロダクション】 ・開会挨拶、振り返りを兼ねて自己紹介 ・前回の振り返り（木村）
13:30～14:45	【グループワーク1：テーマについて話し合う】 テーマ：原子力に関心を持つためにはどうしたらよいか？　無関心は本当にダメなのか？「原子力への関心」とはそもそも何なのか？ キーワード：原子力アレルギー、原子力のイメージ、モチベーション ・3グループにわかれて、話し合います。 【全体共有1】 ・各グループ5分で、テーマについての話し合いを発表します。
14:45～15:00	【休憩・質問づくり】 ・各自で、各グループのまとめに対して、質問づくりをします。
15:00～16:05	【グループワーク2：質問への答えをつくる】 ・グループワークで、回答をまとめます。 【全体共有2】 ・各グループ3分で、回答を発表します。
16:05～16:30	【振り返り】 ・アンケート記入 ・本日のフォーラムの振り返り
16:30	終了

このスライドは、第 3 回フォーラムのプログラムとなっております。これは、まだ完全とは言い切れないとは思いますけれども、今回のフォーラムの目的を達成するための、機能するようなプログラムの定型として示しています。

このプログラムの一番のポイントは、赤く囲んだ 2 回のグループワークです。

1 回目のグループワークは、テーマについて話し合うというものです。第 3 回では、「原子力への関心」に関するテーマについて、全員が意見をしっかり言い切る時間になります。

1 回目のグループワークを終えて、グループごとに発表を行なうわけですが、その発表に対してすぐに質疑応答をするのではなくて、質問は各自付箋に書いてもらい、2 回目のグループワークで、その質問に対する答えをグループでもう 1 回考えてもらうことにしました。



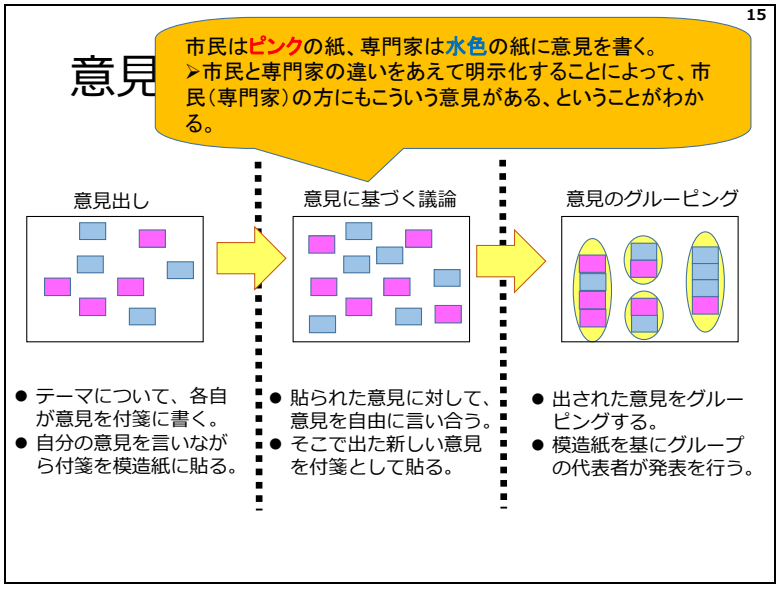
こちらが、グループワークを行なっているときの会場の配置です。ピンク色で示されているのが市民の参加者です。水色で示されているのが専門家の参加者です。1 グループ 6～7 人となっていて、基本的には専門家と市民の方には交互に座っていただきました。

赤い丸で囲まれている方が、各グループに 1 人いるわけですけれども、こちらが、先ほど言いましたファシリテーターということになります。そして、このファシリテーターを支援する人として、黄色のサブファシリテーターが各グループに 2 名ついているという形になります。

今回、どの人がどのグループに入るのか、あるいは、誰がファシリテーターをやるのかということは、全てくじ引きで決めました。もちろん、くじ引きだと、ファシリテーターに何回も当たる人もいれば、まったく当たらない人も出てきます。また、何回も同じグループになる人もいれば、1 回も話す機会がなかった人も出てくるでしょう。それでも、運営側が、「今日はこういうグループで、誰々がファシリテーターをやってください」というように全て決めるよりも、恣意性を排除し、公平にやられているのだと参加者が感じられるように、今回はくじ引きでやっております。

こちらの写真は、グループワークをやっているときのイメージです。今回、参加者の情報は基本的に非公開となっているので、我々運営側が予行演習をしたときの写真を用いています。

左上の写真は､1人1人が自分の意見を付箋に書いているときの様子です｡右側の写真は、意見を言い合っている、あるいは、ファシリテーターがファシリテーションをしているときの様子になります。左下の写真は、全員が意見を言って、まとめた後の、発表の様子になっています。



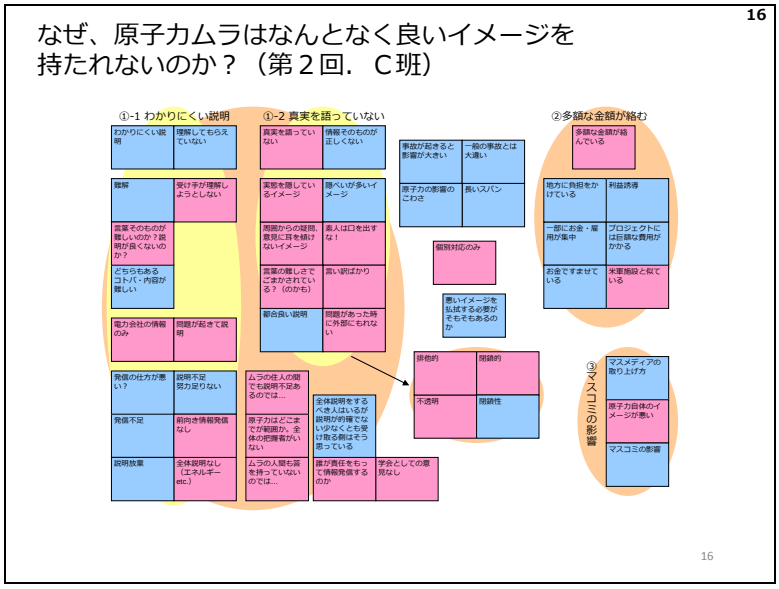
では、先ほどプログラムの中で肝だと言ったグループワークについて、もう少し具体的にその中で何をやっているのかという話をしていきたいと思います。

テーマについてしっかり話し合うのが 1 回目のグループワークなのですけれども、このスライドにあるような流れで行なっております。まず、テーマについて、各自が意見を付箋に書きます。このときに、専門家は青の付箋、市民はピンクの付箋ということで、書いていただく付箋の色を分けています。それらの付箋を、自分の意見を言いながら、模造紙に貼っていきます。

次に、貼られた意見に対して、自由に意見を言い合って、そこで出た新しい意見をまた模造紙に貼っていきます。

そして、出された意見をグルーピングします。そして、そのまとめた模造紙を基に、グループの代表者が発表を行ないます。

今回、市民はピンクの付箋、専門家は青の付箋というように、色を分けました。これは、市民と専門家の違いを明示化し、市民、あるいは専門家の方にこういう意見があるんだ、ということを目で見て分かるようにするために、あえてこうしております。



こちらが、実際に参加者によってまとめられた模造紙を電子データ化したものです。これは第 2 回ですね。「なぜ、原子力ムラはなんとなく良いイメージを持たれないのか？」というテーマについて話し合った結果になっております。

例えば、「わかりにくい説明」がその理由なのではないか。「真実を語っていない」ということが良いイメージを持たれない理由ではないか。あるいは、「多額な金額が絡む」、「マスコミの影響」があるのではないか。こういった形で、たくさん出てきた意見をグルーピングしています。

17

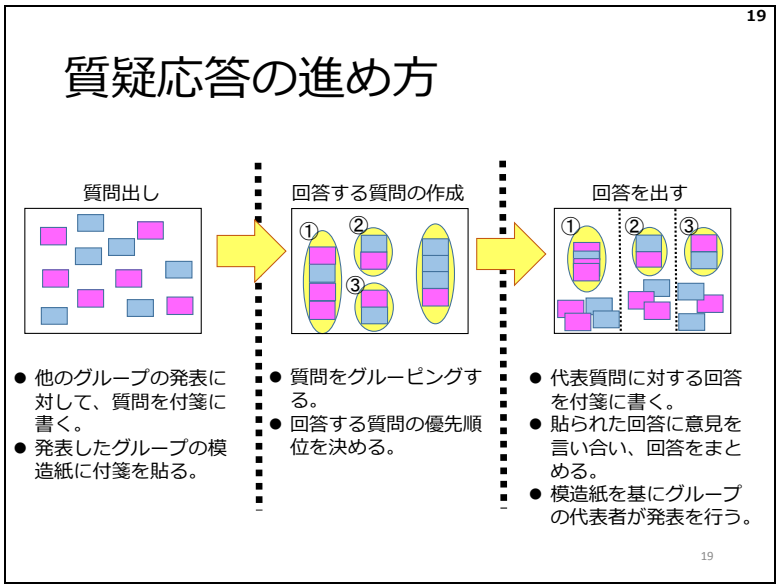
「原子カムラ」はあるのか、ないのか、何なのか？
「原子カムラ」というものをどうしたらよいか？（第５回．Ａ班）

こちらは、実際に作られた模造紙の写真になります。第 5 回、「『原子力ムラ』はあるのか、ないのか、何なのか？」というテーマに対してですけれども、このように、模造紙の中にどんどん書き込んで、どういう意見があったのかということをしっかり模造紙の中にまとめるということを行なっていただいています。

このような模造紙を基に、グループごとに発表を行なうわけですけれども、その発表に対して、他の参加者の方々から質問が来ます。その質問に対して、もう一度グループワークで答えを作るということを行なっています。

なぜ、質疑応答をグループワークでやっていただいたのかというと、意見出し（1 回目のグループワーク）で出てきた意見を、質問に答える中でさらに深めていけるのではないか、というのが 1 つ目の理由です。

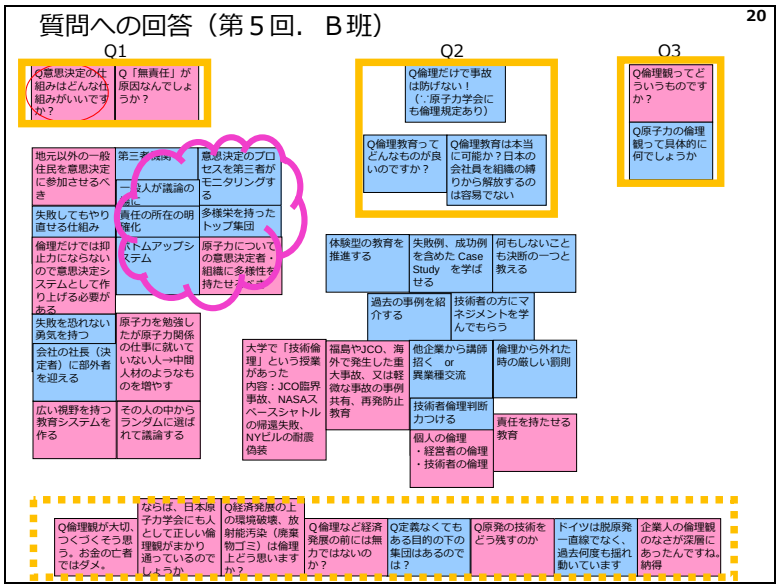
そして、もう 1 点は、ひとつの質問に対する答えにも、またいろいろな形があるのだな、ということをここで認識できるのではないか、ということです。



その質疑応答の進め方をご説明いたします。各グループの発表の後、他のグループの発表に対して、質問を付箋に書いて、そのグループの模造紙に貼るという作業をします。

そうすると、模造紙にいろいろな質問が貼られていくわけですけれども、グループワークの初めに、それらの質問をグルーピングしていきます。似たような質問をまとめて、その中で、特に答えたいと思う質問はどれかという順位付けをしていきます。

その答えたいと思った質問に対して、1人1人が付箋に答えを書いて、言いながら貼って、議論していくということを行なっています。



こちらが、2回目のグループワーク、質問への回答のほうの模造紙となっております。

四角く囲んだ部分が代表的な質問です。これは第5回のB班の模造紙ですが、B班が、

この質問には答えようと思った質問となっています。まず、「意思決定の仕組みはどんな仕組みがいいですか？」、あるいは、意思決定がうまくいかないのは「無責任が原因なんでしょうか？」というような、意思決定に関する質問に答えようとしたということです。2 つ目に、「倫理だけでは事故は防げない」とか、「倫理教育ってどんなものが良いのですか？」というような、倫理教育についての質問をいくつかまとめて答えていこうと。そして、3 番目に、倫理観、あるいは原子力の倫理観とは何なんでしょうか、ということを答えていこうと、B 班は考えたということです。

もちろん、それ以外にもたくさん質問が出ています（下にある、点線で囲まれた質問）。けれども、B 班が答えようと思ったのは、上の代表的な 3 つの質問ということになっています。それに対して、1 人 1 人が回答を出しているという形です。

以上が、実際にフォーラムがどのように行なわれていたのかというご紹介です。

フォーラムの問題点とそれに対する対応

次に、フォーラムの中でどのような問題が起こったのか、また、それをどのように修正していったのかということを話したいと思います。

まず、フォーラム全体に関する問題点としては、フォーラム自体が原子力肯定に偏っているように見えるという声が参加者から聞かれました。なるべく公平にしていこうと我々は考えていたのですけれども、それでもまだ甘かったということです。

では、なぜこのような声が聞こえるのか。ひとつは、専門家と面と向かっては反対意見を言いづらいような雰囲気があるのかもしれない。あるいは、我々運営陣からそういうものを感じているのかもしれない。

もうひとつは、テーマ自体が原子力推進への誘導のように見えている可能性があるということです。例えば、第 2 回のテーマは、「なぜ、原子力ムラはなんとなく良いイメージを持たれないのか？　そのイメージを払拭するには、どうしたら良いだろうか？」です。「原子力ムラの境界を越えていきましょう」と我々が言うことは、フォーラム自体の目的なので、何の問題もありません。ただし、境界を越えるために悪いイメージを払拭する必要があるかどうかは、我々運営陣が判断していいことではなくて、参加者に考えていただくことであるはずです。このテーマ設定だと、その配慮が少し抜けてしまっているのではないか。ということで、こういうところに気をつけなければいけないのだなということを感じていったということです。

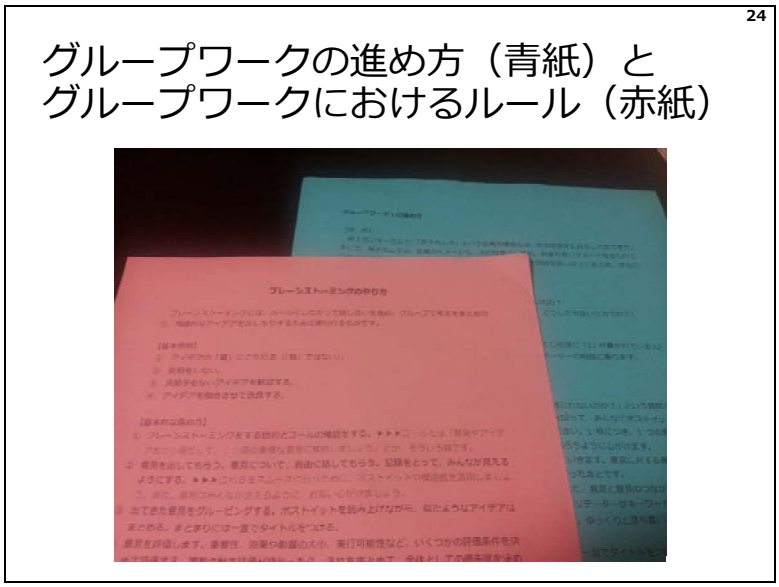
ということで、原子力肯定に見えないように、公平に見えるようにしていくために、フォーラムの進め方、あるいはテーマ設定をどうしたらいいか、ということを考えていきました。

まず、フォーラムの進め方についてです。

そもそも、フォーラムの目的がよく分からないというような声が聞かれることが多かったということで、まず、フォーラムの目的を、参加者、そして運営陣で共有するために、詳細に説明する時間を設けました。

そして、最初の頃はグループワークの進行に戸惑いが見られたのですけれども、これに対して、我々運営陣が「こうやって下さい」というようなことをお願いしていくと、誘導されているのではないかと参加者が感じてしまうかもしれない。ということで、なるべく参加者だけでグループワークを進めていけるように、グループワークの進め方を確認できる資料（青い紙）を参加者に配布しました。

また、サブファシリテーターがグループワークの進行に関わりすぎであるという声も聞かれました。あるいは、コミュニケーション・マニュアルを守ろうとしてくれる方もいれば、あまり意識していない方もいるということを感じていましたので、それに対して、グループワークにおけるコミュニケーションのルール、あるいは、サブファシリテーターの役割をまとめた資料（赤い紙）を参加者に配布しました。



これが、その青い紙と赤い紙になります。

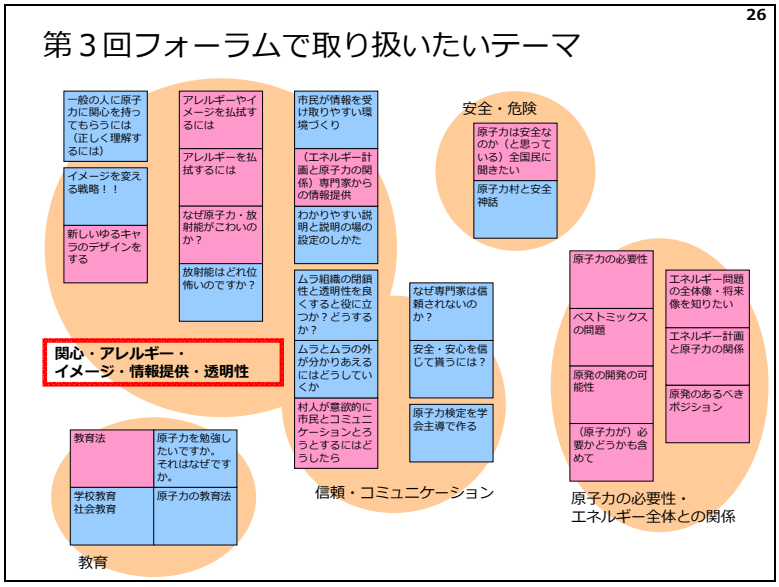
こちらの資料と、先ほど紹介したコミュニケーション・マニュアルは、会場の後ろのほうにいくつかサンプルとして用意させていただいていますので、後ほど休憩のときにご覧いただければと思います。**（※コミュニケーション・マニュアルは、ホームページで公開しております。）**

次に注意したのは、回答の誘導にならないテーマ設定です。

第１回と第５回は、初めと終わりということで、あらかじめテーマを設定していました。

第 2 回から第 4 回は、なるべく参加者が話したいと思っているテーマを選ぼうと考えていました。そして、第 3 回、第 4 回は、実際に参加者の投票によって選ばれたテーマを用いました。

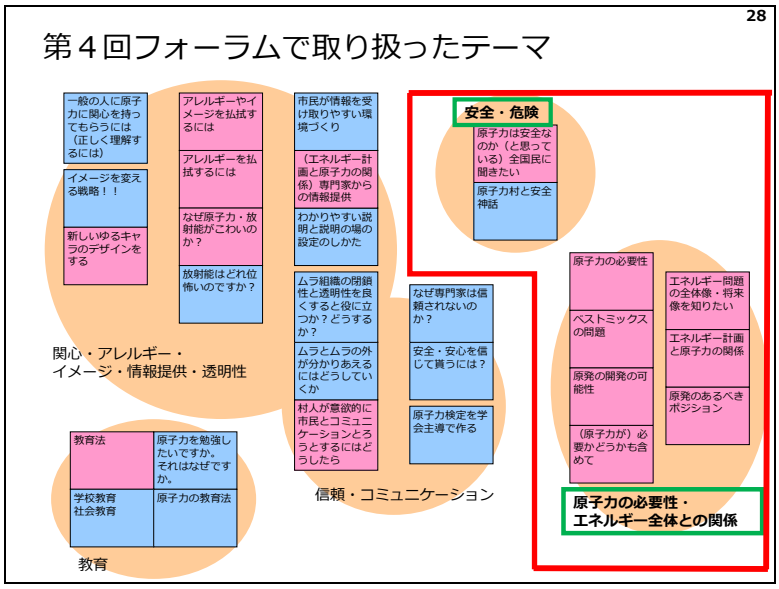
我々に求められていたのは、参加者がフォーラムは公平だと思えるようなテーマ設定をすることです。一方、運営側が参加者に求めているのは、「お互いを尊重する」ということだけです。なので、運営側が「こういう意見がいい、こういう意見は悪い」というような価値観を持っている、と参加者が感じてしまうことがなるべくないように、テーマ設定をしていきました。



こちらは、第 2 回フォーラムのときに、「第 3 回で取り扱いたいテーマを挙げてください」ということで、参加者に挙げていただいたテーマになります。これを基に参加者の方々に投票していただいたわけですけれども、多くの票を得た、関心、アレルギー、イメージなどをテーマにすることにしました。

これらのテーマ案を基に、運営側が設定した第 3 回のテーマは、「原子力に関心を持つためにはどうしたらよいか？　無関心は本当にダメなのか？　原子力への関心とはそもそも何なのか？」というものです。

非常に長いテーマなのですけれども、注意を払って設定をしています。例えば、真ん中の文を消してしまうと、「原子力に関心を持つためにはどうしたらよいか？　原子力への関心とはそもそも何なのか？」となります。このようなテーマだとしたら、参加者は、「原子力に関心を持つことが良いことである」というニュアンスを感じてしまうかもしれません。ですから、関心を持つことが良いことなのかどうかについても話をしていただこうということで、「無関心は本当にダメなのか？」というテーマも入れて、なるべく公平になるようにテーマを考えていきました。



第 3 回の話し合いの中では、関心をメインテーマに据えつつ、教育、コミュニケーションというところまで参加者の話が及びました。

第 4 回は残っている部分を話し合おうということで、安全・危険、あるいは原子力の必要性、エネルギー全体との関係を見ていこうということにしました。これらのテーマは、実は第 1 回の段階から参加者の方々が話したいと言っていたテーマであったのです。ただ、こういったテーマは、意見が割れて、意見のぶつかりが起こる可能性が非常に高いと我々は思っておりました。なので、冷静に話し合う、あるいは、客観的に話し合いを捉えるということが、ある程度できていると我々が感じたときに、初めて取り出すテーマだろうと考えていました。

そして、第 4 回は満を持してこういうテーマを取り扱うということで、それまでとは異なる枠組みで行ないました。

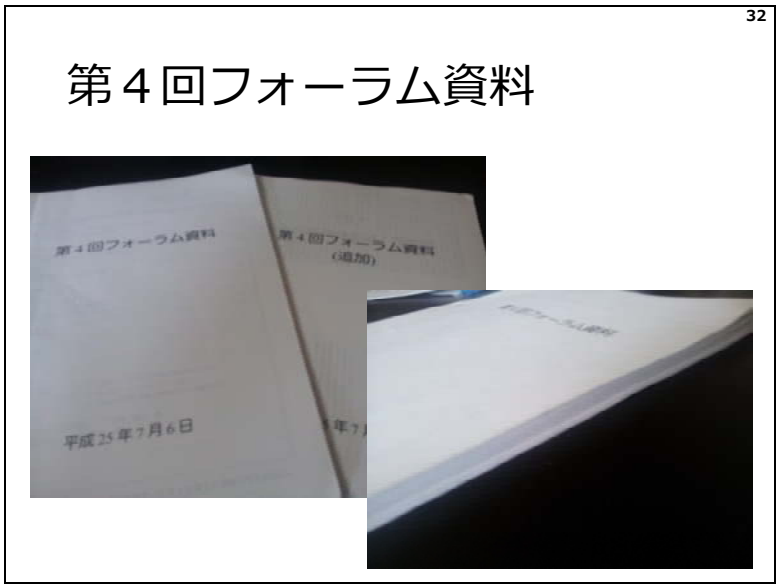
第 1 回から第 3 回を終えて、参加者がフォーラムに慣れてきた。それは、フォーラムのやり方や、ルールへの慣れ、そして、一番大切なところだと思うのですけれども、お互いの人となりを知るということが、第 3 回まででなんとなくできてきたのかなと、我々が外から見ていて感じました。その結果、冷静に話し合う、客観的に話し合いを捉えるということが行なわれているように見られる。

そういう中で、ようやく、自分の意見や言いたいことをはっきり言える枠組みを作っていこうというのが、第 4 回フォーラムとなっております。

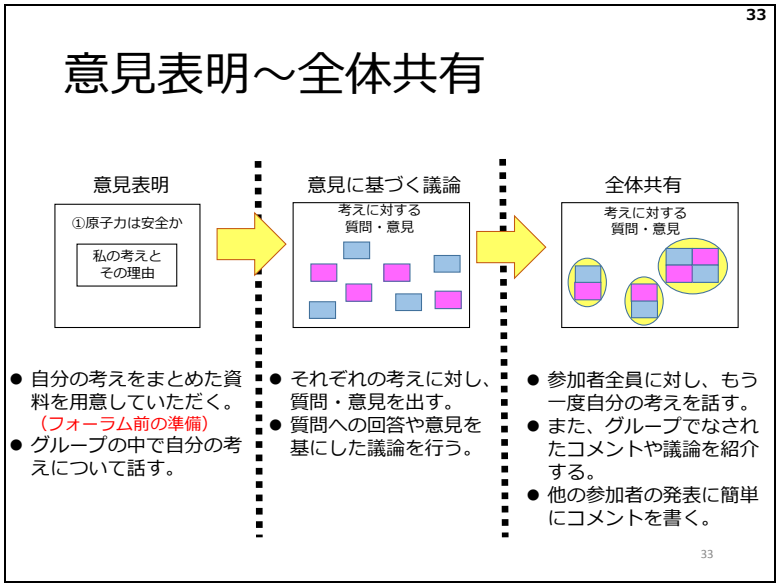
そのために、今までとは違った形になりました。

まず、参加者に、第 4 回フォーラム前に、自分の意見をまとめた資料を作ってもらいました。これは第 3 回から第 4 回の間の宿題ということで、1 ページに自分の意見をまとめて、

その意見をフォローする資料を添付してくださいということで、突然のお願いだったわけですけれども、参加者の皆様にしていただいたということになります。



こちらが、その第 4 回の資料です。右の写真にあるように、すごく分厚い資料になりました。1 人 1 人が、言いたいことがたくさんあったのだなということを我々運営陣も感じた次第です。



こちらが、第 4 回フォーラムの進め方です。

まず、いつものようにグループワークをしますが、進め方が違います。作っていただいた資料を基に、グループの中で自分の考えについて話していただきます。

それに対して、グループの中で議論を行なっていただきました。

そして、グループ内での議論を基に、今度はグループの中でではなくて、参加者全員に対して、自分の意見を発表していただきました。発表の中では、グループでなされた議論であるとか、質問と回答を紹介するというようなことも行なってもらいました。

この発表に対して、簡単にですけれども、他の参加者がコメントを書くということで、自分の発表に対して、他の 19 名分のコメントが返ってくるというような形となっております。

第 4 回のフォーラムは、それまでとは違った枠組みということで、参加者から多くの声が寄せられました。

まず、自分についてですけれども、「自分の意見をはっきりと表明する機会に充実感があった。また、自分の意見を深められた」というようなご意見がありました。第 1 回から第 3 回までは、本当に話したいと思っているテーマではないところを話していて、第 4 回で一番話したいことを言えたというところに、ひとつの満足感があったというような意見が聞かれます。

また、他の参加者については、「1 人 1 人の率直な考え方、意見を知ることができた」というご意見があります。第 3 回まではふわっとしたテーマで話していたので、その人の人となりは見えてきていたのかもしれませんが、その人が原子力に対してどういう思いを持っているのかというようなところは、第 3 回までではなかなか分からなかったのかもしれません。それが、第 4 回でようやくしっかり分かったということを言う方が非常に多かったということです。そして、1 人 1 人の意見を知る中で、「専門家と市民の意見は逆であることが多いということが分かった」というコメントも聞かれました。また、それを共有できたということをおっしゃっています。

この中で、意見が逆であるということが、原子力ムラの境界と関係があるのではないか、というような声もあったのですけれども、意見が違うということを反発なく受け入れることができていたということは、ある意味、フォーラムの目的に沿っているのかなと思っております。

参加者から寄せられた声

ここまでフォーラムの状況をお話ししてきたわけですけれども、最後に、フォーラムに対する参加者の声、特に、フォーラムの狙いに対してどういうことを思ったのかということを話して、私の発表を終わりにしていきたいと思います。

フォーラムが終わった後、個別にインタビューを行なっているのですけれども、その中で聞かれたコメントをご紹介します。

フォーラム参加前に、市民は専門家に「難しいことを言うんだろうな」、あるいは、「お高くとまっているんだろうな」というイメージを持っていました。専門家は市民に「感情的に批判してくるんだろうな」「聞く耳を持たないんだろうな」というイメージを持っていました。このように、お互いの思い込みによるイメージで、お互いに距離を取ってしまっているような状態でした。これが、境界のある状態と言えるのではないかという声が聞かれました。

それに対して、フォーラム参加後は、市民は「専門家もただの人なんだ」「専門家の中にもいろんな考え方があるんだな」ということに気づき、専門家は「市民から必ずしも責められるというわけではないんだ」「市民にはちゃんと話をすれば通じるんだ」ということに気づいた、とおっしゃっています。同じ意見になることは必ずしも必要なく、自分とは異なる意見であるが、なぜそう考えるのかをお互いに理解することが大切なのではないか。境界というものは、お互いの思い込みでできていて、直接会って話し、お互いの人となりを理解すれば、境界は越えられるかもしれない。こういう声を参加者の方々からいただくことができました。

そして、第5回フォーラム終了後のアンケートで、「シンポジウムで読み上げてほしいコメントはありましたらお書きください」とお聞きし、アンケートに書いていただいたコメントがあります。最後に、こちらを紹介したいと思います。

まず、市民の参加者からです。

- 意見のへだたりを越える前に、冷静に意見を言える、この人となら意見を言えるし、聞ける、という人と人の信頼関係を築くことが大切。それには時間をかけて、継続的な取り組みが必要と感じました。
- 信頼関係を築くためには、きれいごとを言うだけでなく、不都合なことも正しく情報公開し、スピーディに提供していくのが一番ですが、専門家が根本的に一般人をバカにして、無能扱いして、どうせ無理だろ？　的な心掛けでは、信頼なんかされないと思いました。対等な関係で話し合えなければ、真の理解など得られませんし、不信感にしかならないと思いました。情報を正しく出すこともまた必要と思います。
- 原子力ムラの住民の方はぜひ、一般住民と原子力についてコミュニケーションを図って下さい。分からないなりにいろいろ考えています。
- コミュニケーションを取ることの大切さを認識しました。

専門家からのコメントは以下になります。

- できるだけ一般的な考え方を心掛けていたが、あらためて自分がムラの考えにそまっていたことに気づいた。
- 信頼の損失は大きく、地道に分かりやすい説明をくり返していくことが境界を越えるために必要なことを痛感しました。

- 説明不足、努力不足を毎回痛感。たゆまぬ努力で失われた信頼を少しでも回復させたい。
- 原子力技術者に対するマネジメントおよび倫理教育が大切です。
- 専門家、一般の方、各 10 名の意見ではあるが、どうするべきという点で考えが整理されたのはよかった。
- 今回のフォーラムでは、一般の方と言いながら議論に前向きな立場の人々であり、ある程度議論がかみ合うのは当然という気もした。
- フォーラムで専門家と一般の方が一緒に出した結果は一様ではありませんが、それを「ムラ」の組織を変える動きに進めてください。
- ぜひ、今後もこのような活動を続けてほしいです。
- 原子力で安全神話が続く限り、事故は必ず起きる。公正な研究を望みます。

私の発表は以上になります。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

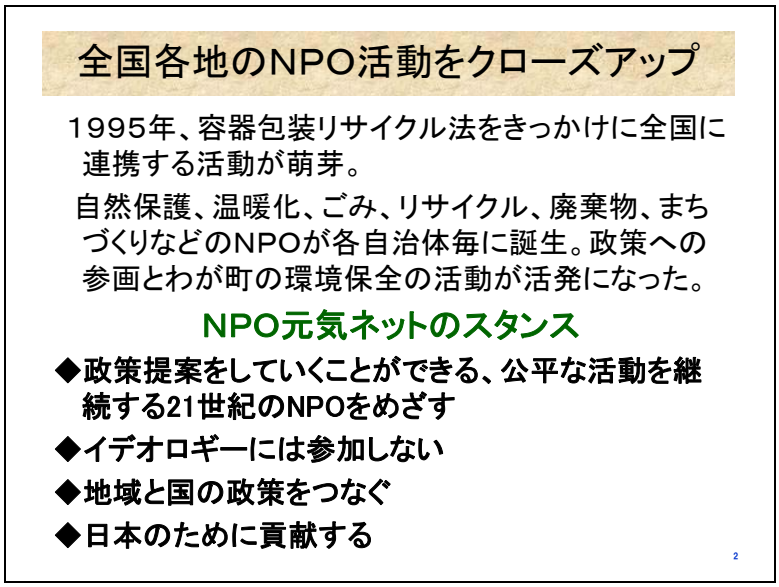
（司会）　竹中さん、どうもありがとうございました。

（司会）　引き続きまして、NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット、鬼沢良子事務局長からお話をいただきます。鬼沢さん、よろしくお願いいたします。

（鬼沢）　皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました、持続可能な社会をつくる元気ネットの鬼沢と申します。今回、このフォーラムを運営するにあたり、木村さんから協力依頼がありまして、とてもうれしく、いい機会だと思って、参加をさせていただきました。

NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネットの紹介

最初に、持続可能な社会をつくる元気ネットがどういう NPO かということを、簡単に紹介させていただきます。

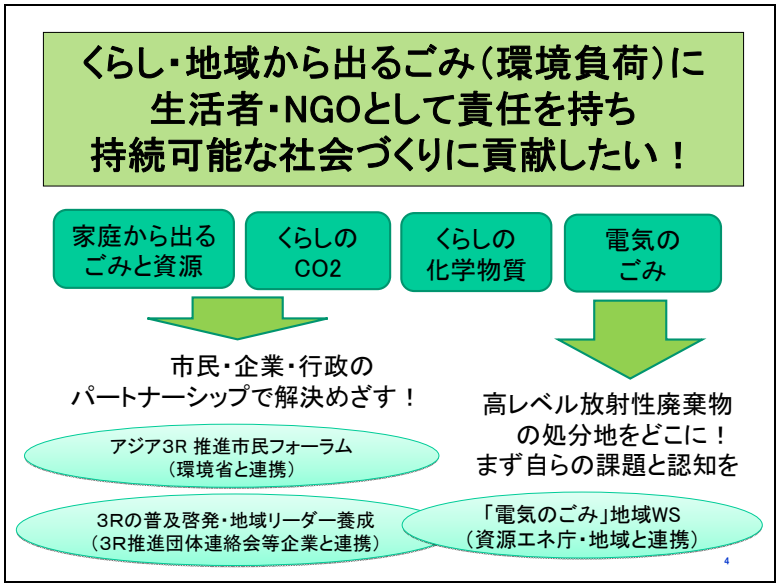


1995 年に容器包装リサイクル法ができたのをきっかけに、全国各地で、リサイクルを進める市民の活動が広がりました。同時に、環境保護や自然保護、あるいはまちづくりといった NPO の活動が盛んになったのですけれども、私たちは、その市民の活動、専門家の活動、あるいは自治体で一生懸命廃棄物問題に取り組んでいる皆さんのゆるやかな連携を作ることで、社会がより早く循環型社会に変わっていくことになるのではないかということで、ネットワーク作りを目的にした市民団体として発足いたしました。今年で 17 年目になります。

そして、このスライドに書いてある 4 つのことをスタンスにして、活動を続けてまいりました。

具体的には、2001 年から、「市民がつくる環境のまち“元気大賞”」という事業をやってまいりました。12 年間、全国各地の環境のまちづくりに取り組んでいる活動をクローズアップする形で、応募いただき、表彰をしてきたのですけれども、翌年には必ず、入賞した地域に、私たち自ら、あるいは一般参加者を募って、エコツアーを実施しまして、地域の活動を学んだり、その地域での新たな活動の連携を広げてまいりました。

12 年間で入賞が 89 事例あるのですが、その中のよりすぐりの 31 事例を、このたび英文をつけた冊子（「私たちの地域づくりから学ぶ持続可能な未来への一歩」）にしまして、これから日本各地の活動を、アジアの地域に広げていきたいと思っております。



私たちは、最初に、家庭から出るごみの問題に取り組みました。廃棄物をどのように処

理していくのがいいのか。ごみ問題に私たち自らが関わっていきたいということで、活動を続けてきたのですけど、私たちの生活の中には、いろいろな課題があります。その活動の中では、必ず連携・協働するということを一番大切にしてまいりました。

先ほどご紹介しました、これからアジアに向けて情報を発信していきたいというのは、「アジア 3R 推進市民ネットワーク」という事務局を続けてまいりまして、環境省の事業と連携しながら、毎年アジアで国際会議を開くときに、同時に市民の NGO 大会を開いてまいりました。

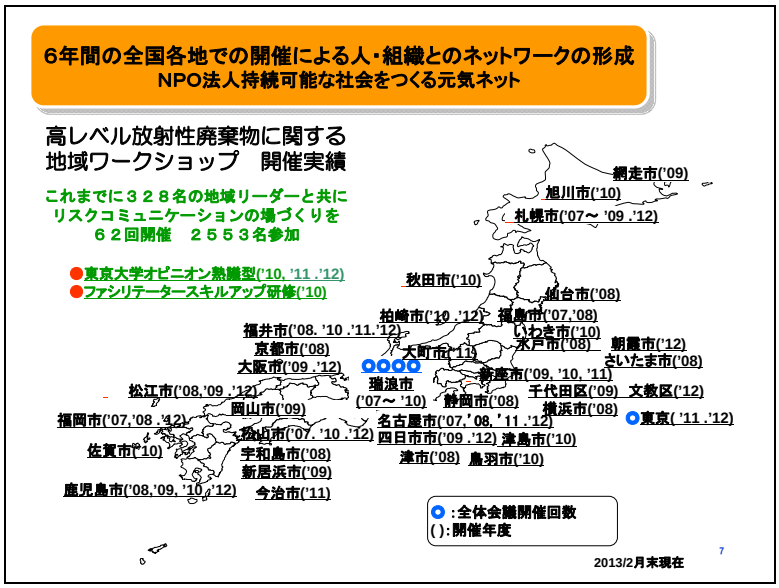
それから、3R の普及啓発や、地域リーダーの育成ということで、企業と連携して事業も続けてまいりました。

また、「電気のごみ地域ワークショップ」については、この後詳しく紹介をさせていただきます。

私たちは、元々家庭から出る廃棄物をテーマに活動を続けてきたのですけれども、2007 年 4 月に東洋町の町長がリコールをされたことを知り、原子力の廃棄物問題が大きな課題として社会にあるのだということを、私たち自身が認識しました。

そして、ちょうどその年に、経済産業省の資源エネルギー庁の企画提案募集に対して、「電気のごみ　もう、無関心ではいられない」というテーマで、地域で学び合いの場作りをしようということを企画提案して、採択されました。そして、毎年新たな企画を加えながら、企画提案をしてきて、6 年間この事業をやらせていただきました。

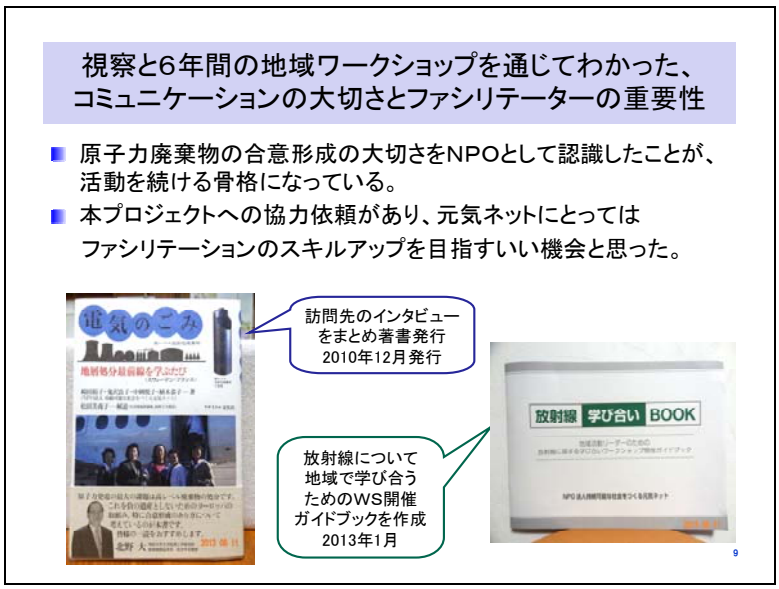
これは市民参加によって、地域でワークショップを開くということなのですけれども、2007 年から 2012 年の 6 年間で、全国 62 地域で実施してまいりました。市民自らが参加することで、こういう課題があるということをまず知るということを大切にしてきました。このワークショップの一番のポイントは、地域のリーダーの方に話し合いのファシリテーターになっていただくということです。



これは、どこでワークショップを開いたかという地図ですけれども、この中では、ファシリテーターの皆さんに、ファシリテーションについて、あるいは地層処分、高レベル放射性廃棄物の処分について、詳しく学んでいただきたいということで、木村先生にも参加いただいて、東京大学で熟議型のワークショップをしたり、ファシリテーターのスキルアップ研修をしてまいりました。

そんな中で、各地で「一歩先を進んでいるスウェーデンやフランスでは、どのような地域とのコミュニケーション、市民とのコミュニケーションをしてきたのだろうか？」という質問が出てきました。私たち自身もそのことに非常に関心がありましたので、3 年目の 2009 年に、再度私たちがこの事業をさせていただくということが決まった時点で、元気ネ

ットのメンバー4 人で、自費でスウェーデンとフランスに行ってまいりました。そのときのメンバーが、今回のこのフォーラムにもサブファシリテーターとして参加をさせていただいております。



その訪問の中で、各地でお話をうかがったものをインタビュー形式で本にまとめたのが、こちらになります。

それから、3.11 の震災後に、私たちがずっと開いてまいりましたワークショップ形式で、放射線について地域で自ら皆さんに学んでいただきたいと思って作ったのが、こちらの「放射線学び合い BOOK」です。ワークショップをどのように開くかというマニュアル本も作りました。

フォーラムについて：サブファシリテーターの立場から

ここまで、簡単に元気ネットの今までの活動を紹介させていただきました。ここからは、今回のフォーラムについて、サブファシリテーターの立場からお話をさせていただきたいと思います。

フォーラムに向けて、9 回の研究会（準備会）を行ないました。その中で、先ほど竹中さんのお話にもありましたように、模擬フォーラムを実際に開催してみたり、これまでの私たちのワークショップの経験を活かして、どのように運営していったら、公平に、淡々と進行ができるのだろうかということを、いろいろ試行錯誤いたしました。

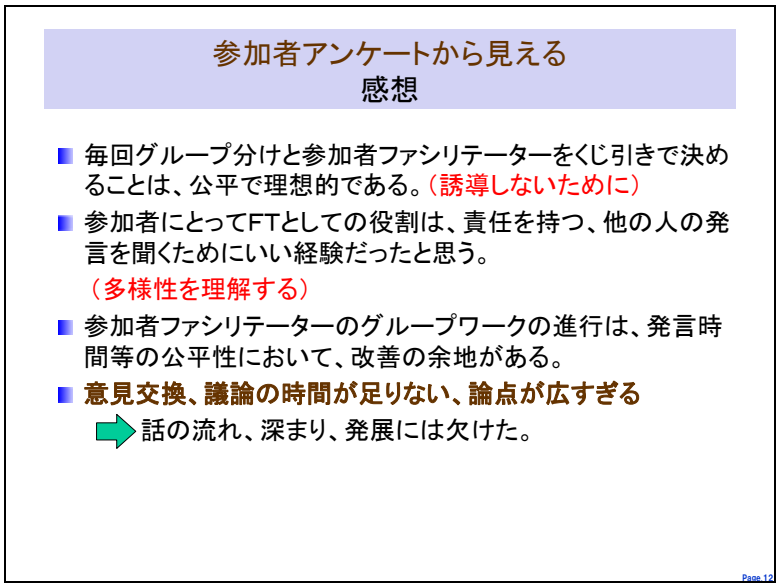
特に、私たちにとって改めて勉強になったのが、先ほどからずっとお話に出てきております「コミュニケーション・マニュアル」です。これを一緒に作り上げていったことが、

非常に勉強になりました。

今回のフォーラムに、サブファシリテーターとして、運営側として、元気ネットが関わらせていただいたわけですが、今まで私たちが開いてきたワークショップとの違いに、非常に気をつけてまいりました。

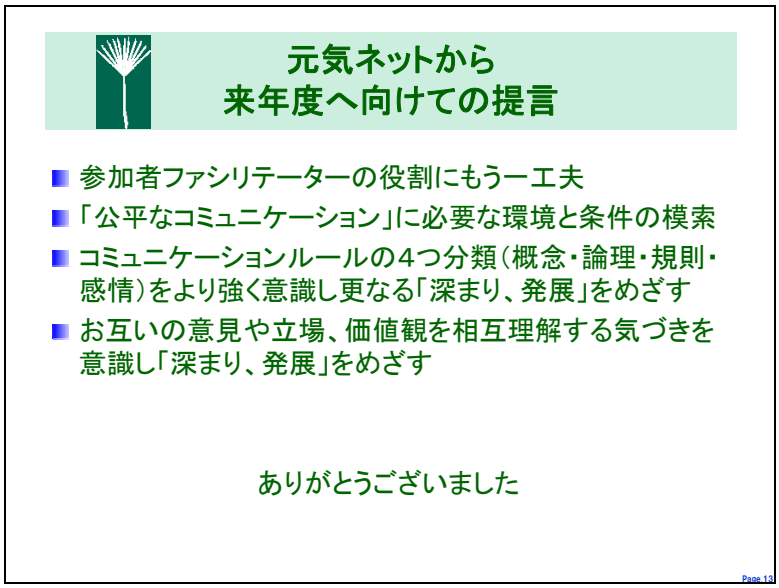
特に、先ほど竹中さんの話にもありましたけれども、こちらが誘導してはいけないということに非常に気をつかいました。ですので、関与しすぎないこと。ファシリテーターをしてくださっている方の、あくまでもフォローとして、時間管理をするとか、見える化のお手伝いをするとか、そういうことに非常に気をつけてまいりました。

それでも、やはり初回の参加者からのアンケートには、「元気ネットの言葉が強く、サブファシリテーターの誘導を感じた」と書かれておりました。ですから、まだまだ気をつけなければいけない点があるのだと、私たちも反省いたしました。



それから、参加者のアンケートから見える感想ですが、例えば、意見交換や議論の時間が足りなかったり、論点が広すぎるというアンケートのお答えがありました。私たちはなるべく関与しないことにしましたので、そうするとどうしても話の流れ、深まり、発展には欠けたことを実感しております。

誘導しないように、なるべく公平で理想的なフォーラムにするために、参加者にファシリテーターをお願いしたのですけれども、やはり個人差もありましたし、関与しすぎないということが、結果的にはグループワークの進行において、発言回数や時間において公平性に欠けたと思えたので、今後の改善点ではないかと思っております。



今まで話したことが、今年度の経験を基に、来年度に向けての改善点になるのではないかと思います。

ここまでがサブファシリテーターをさせていただいた元気ネットのスタッフと私からの報告ですが、この後、総合ファシリテーターを務めた理事長の崎田から一言ご報告を申し上げます。

（司会）　ありがとうございました。それでは、持続可能な社会をつくる元気ネットの崎田裕子理事長からお願いいたします。

フォーラムについて：総合ファシリテーターの立場から

（崎田）　今回のフォーラムでは、元気ネットからは事務局メンバー5 人がサブファシリテーターとして関わらせていただいたのですけれども、実は、総合ファシリテーター（司会）という役割も、元気ネットが担当させていただきました。やはりそれも今回の研究の中に記録として留めていただいたほうがいいのではないかと思いまして、一言、私からコメントさせていただきたいと思っております。

総合ファシリテーターの役割をどのように考えたかと申し上げますと、研究グループの皆さんと連携をして、多様な参加者の方々（首都圏住民、原子力学会員）にとって、安心・信頼・公平感のあるような運営をするということが大変重要なことだと感じて、進行をしておりました。

配慮事項をいくつか挙げてみました。

やはり住民の方は、うまく話せる場なのかと心配をされていましたし、専門家の方は、事故の後、厳しいことを言われて、話し合いが成り立たないような、つるし上げのようなこともあるのではないかと危惧された方もいらっしゃったようです。最初は大変緊張感が走っておりました。ですから、まず、そういう緊張感をほどいて、安心して話していただけるような、穏やかな態度、言葉、進行に努めました。具体的に申し上げますと、フォーラムの開催時期が梅雨だったのですけれども、5 回とも非常に天気がいい日で、いつも天気のお話から入っていきました。そのように、皆さんに日常を感じ取っていただけるような努力をいたしました。

2 つ目に、公平感のある場作りに努め、どのような質問・意見も受け止める場として、参加者の方に信頼感をもっていただけるように配慮いたしました。市民の方からも、そして原子力学会の方からも、「この場は、どんな質問を出しても OK なんだな」と感じていただくということが、大変重要だと思っています。ただし、司会者の私が、内容を深めるためにコメントをする、あるいは、皆さんの発表に対するコメントをする、というようなことは極力控えて、公平な情報提供に努め、特定の考えの誘導になっていると皆さんが感じないように、非常に気をつけて進行いたしました。

3 番目は、やはり今回は研究として実施しておりますので、研究代表者の方、そして研究グループとの連携を重視し、特に時間設定を考えながらプログラムを作っておりますので、特定の発表が予定よりも長くなるということがないように、時間管理を徹底して、プログラムの円滑な実現に努めてまいりました。

先ほどからいろいろお話がありましたけれども、元気ネットとしては、私が総合ファシリテーター、そしてメンバーがサブファシリテーターをやらせていただきました。実は、毎回話し合いのテーマや、グループワークのメンバーが違う中で、ケースバイケースに対応して、同じ質を確保していくというのは非常に難しいことで、我々が引き過ぎると話が進まないし、出過ぎると関与が強すぎるというご意見が出てきます。そういう意味で、私どもも大変勉強になり、参加させていただいてとてもよかったと感じています。

ただし、ひとつ言わせていただくならば、私どもも NGO、環境系の市民の立場から活動しており、市民の方とは信頼が築けるという安心感がありましたが、この団体がどういう団体かというような基本的な情報や信頼感のない状態の中で、いつものような形でやっても、信頼が築けないということが私たちもよく分かりました。

ですから、来年度は公平な場作りを目指して、多様な NPO／NGO が協力し合ってやっているということを、最初に参加者の方に説明した上で進めていくということも大事なのかなと考えております。今後もどうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。（拍手）

（司会）　どうもありがとうございました。